

# 121 press

いちにいち・ぷれす

第4号

平成26年2月1日発行

企画・編集:せんがわ劇場市民サポーター

調布市せんがわ劇場市民参加演劇公演も三年目。今回は「わが町、せんがわ」三部作の完結編となります。そこで歌舞史劇「わが町、せんがわ」(おらほの時代(まつり))の上演にあたり、作・演出を担当された末永明彦さんからメッセージをいただきました。

我が、「わが町、せんがわ」

末永 明彦

三年前の二〇一一年九月、「わが町、せんがわ」というお芝居を「せんがわ劇場」で創りました。ここ仙川の町に取材しつつも、架空の町「せんがわ」ということにしました。

参加者やお客様の中には、ここ仙川以外で生まれ育ち、暮している方がたくさんいます。かくいう僕も仙川以外で生まれ育ち、暮しています。

でも、この三年間に上演した作品には、誰もが心の中にある故郷や、今住んでいる町を「わが町」と想い、町やその町に住んでいる人たちすべてを愛し、大切に想うことが出来ないか、そんなことを考えながら三つの作品を書き、創って来ました。この町の人も、この町の人でない人も、プロフェッショナルもアマチュアも、「みんなで創る、みんなが創る」のが『わが町、せんがわ』です。

特に、初年度の三月に東日本大震災が起きて、いままでのこと、これからの生き方について、日本

中の人たちが考えたのではないのでしょうか？僕も考えました。一生懸命に考えました。

考えましたが、答えは見つかりませんでした。そのとき頭に浮かんだ言葉「幸せになるために」が、私の中で大切な「わが町、せんがわ」のテーマになりました。

人が幸せに生きるために大切なこと。

良き大人に育てられた子どもは、良き大人に育ち、良き社会が育まれる。

いまを生きる私たちが、忘れてはいけない、今を創った多くの人たちのこと。

今、目の前にいる人も、いない人のことも。

幸せになるために必要なこと。

僕は今、そんなことを考えながら、歌舞史劇「わが町、せんがわ」(おらほの時代(まつり))を、みんなと一緒に創っています。



せんがわ劇場演劇コーディネーター  
末永 明彦さん

私は中学二年生の時から、『ちいさな劇場の物語』『サネアツさん』そして『おらほの時代』と「わが町、せんがわ」三部作全てに出演させて頂いています。中学二年生の年にはじめて『小さな劇場の物語』に参加したときは、白猫で実は劇場の神様であるシロという役でした。演技未経験の私は、右も左も、それこそ上手も下手も分からず、ただ必死についていきました。閉館前日の劇場を巡り、色々な人の思いが交錯していくストーリーで、とても温かな舞台だったこともあり、大人の方達にとっても優しくしてもらい、楽しくお稽古したことを覚えていきます。

主人公が自分の幼少時代である戦後の昭和を回想しながらストーリーが進んでいき、現代で私たちができることは何かを考えさせられる内容になっています。私は現代で両親を亡くしアメリカで一人暮らす愛という女の子の役でした。とても難しく、悩みどおしでしたが、子供達の笑顔や見守ってくれる大人たちに助けられ、お芝居の楽しさを知ることができました。

『おらほの時代』は・・・楽しんでいきますという事だけ、お伝えしておきます！ぜひ見に来て下さい！



3年連続参加!  
市民キャスト  
古本 苑子さん